

# 現代日本の青年期女子における 善悪に関する意識構造と道徳領域判断

A Study on the Sense of Morality in Japan:  
Differential of domains and conscience

阿部 洋子

## 問 題

藤原正彦の『国家の品格』(2006)は、昨年のベストセラー本となった。また、2004年には、河合隼雄主導による『心のノート』が小学校、中学校の道徳の授業の副教材として無料配布された。いずれの書物も、日本人の道徳心の低下を嘆き、歯止めをかけるにはどうすればよいかというところに主眼がある。

藤原氏は、道徳心の低下の一因として、日本人が祖国への誇りや自信を喪失したことや、誇るべき特性、伝統を忘れたことにあるとしている。そして日本人が品格を取り戻すためには、優れた文学、芸術に接することや、「武士道」精神の復活が必要だと述べている。また、道徳心向上の必要性を提言するにあたり、法律によって規制できる行為には限度がある。そして、日常生活の様々な行為は、六法全書には書かれていないが、「やるべきである」「やってはいけない」という、暗黙のルール、即ち、「道徳」によって支えられ、共同体の生活の快適さが保障されるのではないかと述べている。河合氏らは、道徳の授業において、個性の伸長や、他者への思いやり教育だけでなく、愛国心、郷土愛、祖先崇拜、自然に対する畏敬の念の育成などをより積極的に教育することが重要だという立場から『心のノート』を配布したと考えられる。

ところで、子どもたちの道徳心は、誰がどのように育成していけばよいのだろうか。家庭での躾、学校での道徳の授業、地域社会での関係性のあり方などが重要であろう。しかし、青少年を取り巻く環境が、道徳心を育成するための場としての機能を低下させている。だから、ごく普通の子どもだと思われていた子どもが問題行動を起こし、周囲の大人たちを驚かせているのではないと、マスコミが指摘する。それでは具体的に何が失われたのだろうか。

ところで、道徳や、社会的慣習は、過去から伝達されてきたものであり、自己の外部に存在す

るルールである。第二次世界大戦後、日本人は自分たちほど封建的で、軍国主義的な国家・国民はないと思ってしまった。その結果、これまであった価値観の多くは否定されるべきものだと思い込んでしまった。それに代わって、すべての行動を決定する基準は、個人の内部に存在する、即ち、善悪の行動基準は個人の判断で決めることが「個人主義」だと思ってしまった。その結果、自分中心主義、勝手気ままな人間が増え、道徳心の低下が嘆かれるようになったのではないだろうか。家庭での躾、道徳の教科書の内容、地域社会の慣習から消えた事柄、重要なことではないとされてしまった事柄にはどのようなものがあるのだろうか。それら失われたルールの中に、道徳心の低下を防ぐ鍵があるのではないだろうか。そこで、先ずどのような行為を道徳あるいは社会的慣習の領域の問題と考えられているのか、どのような行為を個人の判断に任されるべき問題だと考えられているかを知ることが必要ではないかと考えた。

Smetana等(1983)は、道徳・社会的慣習・個人のそれぞれの領域に属すると判断された行為を列挙して貰い、続いてそれらの行為は、規則の有無に関わらず、即ち法律による罰則規定の有無に関わらず、「善い／悪い」と思うかの判断を求めた。その結果、19-20歳以上になれば、道徳領域に属する行為は、75-100%の範囲で、規則や期待の有無に関わらず(「規則随伴性」と称する)、「善い／悪い」と判断することができるようになる。一方、個人領域に属する行為は、88-100%の範囲で、個人の自由に任せる方がよい(「個人決定権」と称する)と判断されると報告している。道徳と類似する概念として、社会的慣習があるが、それらの行為は、道徳領域に属する行為における、規則随伴性と善悪の判断の間に見られる強い関係性は見出されなかった。つまり、Turiel(1983)が述べるように、道徳領域と社会的慣習領域は、異なる行為として認識されていると結論づけている。

また、Smetana等は、こうした領域判断と規則随伴性の一致は、10歳児では認められないことから、この測定方法は、道徳性の発達尺度として利用できると述べている。つまりTurielやSmetana等によれば、道徳性の発達とは、道徳領域に属する行為の善悪の判断を、法的な拘束の有無、他者からの期待の有無に関わらず、自律的に行うことができるようになることと関係していると考えているのである。

そこで、これまでも予備的調査を実施(阿部：1996、1998、2005)し、現代の日本における道徳構造の特徴を、領域判断、悪さの程度、社会的文脈などから検討してきたが、今回は、青年期女子を対象とし、善悪両方の行為について、検討することにした。ニュートラルな状況では「悪い」と感じられる行為であっても、「わざとやった訳ではない」「やむを得ない事情があった」など、社会的文脈によっては、「すべきでない」悪い行為が「しても構わない」行為へと、判断が変更されることがある。ところで「しても構わない」と判断することは、その行為の「悪さ」の程度を

低く評定することに繋がると考えられる。やむを得ない事情があったとしても、その行為を悪いことだったと思えるかどうかは、その行為がニュートラルな状況で、「道徳」領域に属する問題だと判断しているかどうかに関係しているのではないだろうか。また、その行為を「個人」領域に属する問題だと判断することによって、「しても構わない」と感じるだけでなく、大して悪い行為ではないと考えるようになるのではないだろうか。

次に、「善い」行為については、「道徳」「社会的慣習」領域に属する問題だと判断していることによって、「する必要がない」と感じている行為であっても、善いことだという評定が高く保たれるのではないだろうか。更に、「個人」領域に属する問題だと判断されている行為は、「実行するか・しないか」の判断基準は自分自身にあるのだから、その時の気分や、好き嫌いによって判断されるという欠点がある。したがって、「善／悪」に関する様々な行為の領域判断が「道徳」領域にあることによって、「善／悪」の評定が高く保たれ、日常生活場面において頻繁に実行される、あるいは抑制されることに繋がるのではないだろうか。そうであるならば、ある行為がどの領域に属する行為であるか、その構造を知ることによって、現代日本社会における「道徳心の低下」の様々な要因の内の一つを知ることができるのではないかと考えた。

## 方 法

### 1. 調査対象者および調査の実施方法

調査期日：2006年10月1日～22日

調査対象者：埼玉県および神奈川県にある私立大学の通学制女子1～4年生に対して、留置法により実施した。授業中に記入方法についての若干の説明を行い、翌週の授業終了後に回収した。調査対象者は極めて好意的な態度で回答に応じてくれた。回収された質問紙票のうち、記入漏れなどの欠損データを除き、最終的に209名の女子（平均年齢＝20.42歳、SD＝2.48）を分析の対象とした。

### 2. 質問紙の構成

#### 1) 道徳性尺度（悪さ）

選定された行為は、大学生86名に対して、法律で罰せられるか否かに関わらず、「道徳的でないと思われる行為」、「道徳的に好ましくないと思われる行為」について、各人が10項目を挙げて貰った結果、抽出されたもので（阿部；1995未発表）、ニュートラルな状況で、道徳領域に属すると

判断される行為であった。こうして抽出された100以上に及ぶ行為について、成人女子を対象に調査を実施した結果、20のクラスターが抽出された（阿部；1996）。その中から、社会的文脈が変わると、道徳領域から社会的慣習あるいは個人領域に、領域判断が変動することが確認された項目（阿部；1998）を中心に38項目が選定された。社会的文脈が変わると、道徳領域に属する行為だと判断されていた行為が、社会的文脈が異なる、即ち、状況が異なれば、個人領域に属する行為だと判断されるという、領域判断の「可変性」自体が、Turiel（1978、1983）、Smetana等（1983）が考えている「道徳」という概念に反する。即ち、「道徳」領域に属する行為とは、社会的文脈がどうであれ、また法律で罰せられるか否かに関わらず、19-20歳以上であれば、領域判断は不変である。それが道徳性の発達だと述べている。したがって、社会的文脈が変わると、領域判断が変わるということが、現代の日本人の道徳心の低下と関係していると考えられる。

そこで、本研究では「道徳性尺度（悪さ）」として、あえて判断が揺れる、不安定な行為を選定した。そして、青年期女子において、どのような特徴が見られるかを以下の側面について検討したいと考えた。

- ①「悪さ」の程度： 選定された38項目について、どの程度悪いと感じるかを、マグニチュード推定法を用い、0～10点の範囲で1点刻みで評定を求めた（非常に悪い：10点～全く悪くない：0点）。
- ②当為性： 選定された38項目について、その行為は「絶対にすべきではない：5点～しても全く構わない。何故してはいけないのか、理由がわからない：1点」の5段階尺度で評定を求めた。
- ③領域判断： 選定された38項目について、その行為を規制するルールは、「道徳」「社会的慣習」「個人」のどの領域に属すると考えるかについて、いずれか1つを選択するよう求めた。

## 2) 道徳性尺度（善さ）

「道徳的に好ましい行為」「求められている行為」については、「心のノート」作成にあたり、京都市道徳教育振興市民会議によって事前に実施された調査（2002）で用いられた項目、現行の『小学校指導書（道徳編）』（1988）、『中学校指導書（道徳編）』（1988）を参考に、「道徳性尺度（善さ）」の27項目が選定された。

- ①「善さ」の程度： 選定された27項目について、その行為をどの程度善いと感じるかを、マグニチュード推定法を用い、0～10点の範囲で1点刻みで評定を求めた（非常に善い：10点～善いことだとは全く考えられない：0点）。

- ②当為性： 選定された27項目について、その行為は「必ずそうすべきだ：5点～そうする必要は全くない：1点」の5段階尺度で評定を求めた。
- ③領域判断： 選定された27項目について、その行為を「した方が善い」と考える「暗黙のルール」は、「道徳」「社会的慣習」「個人」のどの領域に属すると考えるかについて、いずれか1つを選択するよう求めた。
- ④実行の頻度： 選定された27項目について、自分自身の実際の行動として、日常、どの程度実行しているかについて、「いつも実行している：5点～全く実行していない：1点」の5段階尺度で評定を求めた。

### 3) 自己抑制尺度

道徳性尺度（悪さ・善さ）により測定された結果の妥当性を検証するためには、日常生活における行動の自己評定および他者評定との相関を見ることが重要である。しかし、授業での関わりしか持たない調査対象者について、これらの情報を得ることは困難である。したがって次善の策として、道徳性と関係が深いと考えられる「社会性の発達の良好さ」「責任感」「真面目さ」等について測定した結果が、日常生活における行動評定との間で相関が見られるとされ、信頼性、妥当性ともに検証されている複数の質問紙から、いくつかの項目を設定し、それらの結果との相関を見ることにした。但し、これらの調査用紙の対象者は一般的に年齢が低いことや、意見を問うものと事実を問うものが渾然一体となっているなどの問題点がある。

そこで、「予備的調査」において、これらの問題点に修正を加え、青年期および成人期の調査対象者に対しても実施可能な調査項目を作成した（阿部；1998）。本研究では、「予備的調査」で用いた70項目の質問項目の中から、道徳性尺度（悪さ）との相関が低かった「感情の鬱積」2項目と、「解決能力」3項目を除くとともに、残りの65項目の質問項目を更に整理し、「自己信頼に基づく独立心、自立心」「他者からの高い評価」などに関する21項目と、「虚偽性」（以下、L項目と称する）に関する4項目を加えた、合計25項目を用いることにした。評定は、それらの行為が日常の自分の行動にどの程度当てはまるかについて5段階評定法を用い、回答を求めた（非常にそうである（はい）：5点～全くそうでない（いいえ）：1点）。合計得点を「自己抑制尺度得点」とし、合計得点が高いことをもって「自己を律する能力」が高いと考えた。

## 結 果

### 1. 「自己抑制尺度」の検討<sup>(注1)</sup> 虚偽項目 (L項目) の検討

「自己抑制尺度」25項目の中に組み込んだ「L項目」が、独立した因子として抽出されることを確認するために、先ず因子分析を実施した(主因子法、プロマックス回転)。その結果、固有値1.00以上から5因子が抽出された。新たにL項目に組み込まれる項目はなく、L項目として挿入しておいた4項目「あなたのまわりに、嫌いな人は一人もいませんか」「あなたは、その日にすべきことを、やらなかったことは1度もありませんか」「あなたは、他人に知られて困るような、良くないことを考えたことは1度もありませんか」「あなたは、他人の悪口を言いたくなかったことが1度もありませんか」が、第5因子として抽出された。

こうして抽出されたL項目の総得点は調査対象者の95%の者が11点以下であり、12点以上の者は18人であった(Me.=7.21点、SD=2.86、N=209人)。そこで、この18人の回答については「社会的望ましさ」に強く引かれており、信頼性に欠ける可能性が高いと判断し、以下の分析から削除することにした。そのため、これ以降の分析対象者は191人となった。

### 2. 「道徳性尺度(悪さ)」の検討 (Table 1)

#### 1) 「悪さの程度(悪さ)」の検討：GP分析およびクロンバックの $\alpha$ 係数による検討

「道徳性尺度(悪さ)」の38項目についてGP分析を実施した。その結果、道徳性尺度得点(悪さ)の高得点群(上位25%：295点以上、N=48人)と低得点群(下位25%：215点以下、N=49人)において、38項目すべての項目で有意差が見られた。またクロンバックの $\alpha$ 係数を算出したところ、全体および各項目に亘り0.80以上であり、項目水準で高い信頼性が確認された。

#### 2) 「悪さの程度」の因子構造による検討

「道徳性尺度(悪さ)」の38項目における「悪さの程度」について、因子分析を実施し(主因子法、プロマックス回転)、固有値1.00以上により、4因子が抽出された。第1因子は「No.9 他人をいじめる」などで、「狡猾さ」「卑劣さ」「交通法規違反」「男女・性の問題」と命名した。第2

(注1) 紙数の関係で、詳細については、後日に譲るが、GP分析、クロンバックの $\alpha$ 係数などを算出した結果から、項目水準での高い信頼性は確認された。また因子構造は、L項目を除いた21項目において、因子分析(主因子法、プロマックス回転)を実施した結果、固有値1.00以上から4因子が抽出された。第1因子は「意志力・克己心」「努力・辛抱」、第2因子は「独立心・自立心」、第3因子は「自己開示」、第4因子は「他者からの高い評価」と命名した。

因子は「No.25 タバコを吸う」などで、「公共の場でのルールの無視」「自分自身を大切にしない」と命名した。第3因子は「No.15 電車の中で、お年寄りに席をゆずらない」などで、「他者を大切にしない」「物を大切にしない」「関係性の希薄さ」と命名した。第4因子は「No.6 人工中絶をする」などで、「生命軽視」と命名した。

悪さの得点は、「児童虐待」「動物虐待」「いじめ」など、暴力と狡猾さに関係する行為は、高得点を示した。ところが、飲酒、禁煙、物を大切にしない、離婚など、「他者、物、自分自身を大切にしない」行為については、低得点を示した。

### 3) 「悪さ」の当為性：適合度検定 ( $\chi^2$ 検定) による検討

「道徳性尺度 (悪さ)」の38項目について、「絶対にすべきではない」から「しても全く構わない」の5段階評定により、その当為性についての考えを求めたが、集計に当たり、「すべきでない」「どちらでもない」「しても構わない」の3群に分類し、適合度検定を実施し、回答に偏りが見られるかどうかを検討した。その結果、有意差が見られず、判断が3群にばらついたのは「No.38 小学生・中学生が茶髪にする」の1項目のみであった。

次に、回答率について注目して整理をしたところ、「しても構わない」との回答が70%以上になった項目は1項目もなかった。一方、「すべきでない」の回答が70%未満の項目は、「No.6、No.7、No.15、No.17、No.18、No.20、No.21、No.24、No.25、No.26、No.32、No.33、No.38」の13項目であり、「生命軽視」「他者、物、自分自身を大切にしない」に関する項目であった。それ以外の25項目は、「すべきでない」との回答が70%以上であった。

### 4) 「悪さ」の領域判断：適合度検定 ( $\chi^2$ 検定) による検討

「道徳性尺度 (悪さ)」の38項目について、それらの行為を規制するルールが、道徳、社会的慣習、個人のどの領域に属するかを、判断して貰った。適合度検定の結果、すべての項目において有意差が見られ、3領域のいずれかに偏って判断されていることが分かった。

次に、「道徳あるいは社会的慣習」「個人」の2領域に分類して、適合度検定を実施した。これは判断の基準が自分の外部にあると考えているか、自分自身の内部にあると考えているかの差を見たいと考えたからである。その結果、「No.3、No.6、No.19、No.31、No.32、No.33、No.36」など「生命軽視」「狡猾さ」に関する項目で、有意差が見られず、ルールが自分の外部に存在するか、自分自身の内部にあるのか、どちらとも言えない状況にあることが分かった。これらを除く、31項目では有意差が見られ、領域判断に偏りがあることが分かった。

更に、回答率に注目して整理をしたところ、70%以上の調査対象者が「道徳領域」と判断する項目は、「No.1、No.4、No.14、No.23」の4項目であり、「犯罪」に関係する行為、「傷つける」行為であった。また、70%以上の者が、道徳あるいは社会的慣習、即ち自分自身の外部にルールの基

準があると判断した行為は、先の4項目に加え、「No.2、No.9、No.11、No.12、No.15、No.16、No.26、No.27、No.28、No.29、No.30、No.35、No.37」の13項目であり、「公共の場でのルール」「交通法規」に関する行為であった。更に、70%以上の者が、個人領域、即ち自分自身の内部にルールの基準があると判断した行為は、「No.7、No.20、No.24、No.25」の4項目であり、「自分自身を大切にしない」「家族」に関する行為であった。

### 5) 領域判断と当為性との関係：独立性の検定 ( $\chi^2$ 検定) による検討 (注2)

「道徳」「社会的慣習」「個人」の3領域と、「すべきでない」「どちらでもよい」「しても構わない」の当為性の3段階との関連性を検討するために、独立性の検定 ( $\chi^2$ 検定) を実施し、各セルについては、残差分析を用いて更に詳細な有意差を求めた。

その結果、「しても構わない」と考える群において、その行為は「個人」領域に属する問題だと判断された項目は「No.6、No.7、No.17、No.20、No.21、No.24、No.25、No.31、No.36」の9項目であり、「生命軽視」「他者、物、自分自身を大切にしない」ことに関する行為であった。

「するべきではない」と考える群において、その行為は「道徳」領域に属する問題だと判断された項目は「No.2、No.4、No.5、No.8、No.9、No.13、No.14、No.18、No.19、No.23、No.29、No.35」の12項目であり、「狡猾さ・卑劣さ」「他者、物を大切にしない」ことに関する行為であった。

## 3. 「道徳性尺度 (善さ)」の検討 (Table 2)

### 1) 「善さの程度」の検討：GP分析およびクロンバックの $\alpha$ 係数による検討

「道徳性尺度 (善さ)」の27項目についてGP分析およびクロンバックの $\alpha$ 係数を算出した。その結果、道徳性尺度得点 (善さ) の高得点群 (上位25%：219点以上、N = 50人) と低得点群 (下位25%：96点以下、N = 50人) において、27項目すべての項目で、有意差が見られ、項目水準での信頼性が確認された。またクロンバックの $\alpha$ 係数を算出したところ、全体および各項目に亘り0.80以上であり、項目水準で信頼性が確認された。

### 2) 「善さの程度」の因子構造による検討

「道徳性尺度 (善さ)」の27項目について因子分析を実施し (主因子法、プロマックス回転)、固有値1.00以上により、5因子が抽出された。第1因子は「No.1 他人にありがとうと言う」「No.4 学校の先生に挨拶をする」などで、「公共の場でのマナー・エチケット」と命名した。第2因子は「No.20 日本の国を愛する」などで、「愛国心」「郷土愛」「博愛」と命名した。第3因子は「No.24

(注2) 紙数の関係で、独立性の検定の結果は、「Table 1」に有意差の結果のみを記載した。



夢を実現させるために努力する」「No.26 自然を大切にする」「No.15 親孝行をする」などで、「夢の実現」「自然との関係」「親との関係」と命名した。第4因子は「No.16 先祖の墓参」などで、「祖先崇拜」「神仏崇拜」と命名した。第5因子は「No.12 法律を守る」などで、「規則の遵守」と命名した。

「善さ」の得点は、「ありがとうと言う」「自然を大切にする」「法律を守る」「夢を持つ」などが高得点を示し、「神仏に手を合わせる」「日本を大切に思う」などが低得点を示した。

### 3) 「善さ」の当為性：適合度検定 ( $\chi^2$ 検定) による検討

「善い」と考えられている行為について、「必ずそうするべきだ」から「そうする必要は全くない」の5段階評定により、その当為性についての考えを求めたが、集計に当たり、「するべきだ」「どちらでもない」「する必要はない」という3群に分類し、適合度検定を実施し、回答に偏りが見られるかどうかを検討した。その結果、すべての項目において、有意差が見られ、判断が3群にばらついた。「する必要はない」と判断された項目は「No.19 太陽に手を合わせる (64%)」の1項目、「どちらとも言えない」と判断された項目は「No.8 人間関係を大切にするために、自分の言いたいことを我慢する (56%)」の1項目、それ以外の25項目は「するべきだ」と判断された。

更に、回答率について注目して整理をしたところ、「するべきだ」との回答が70%未満になった項目は、「No.8、No.10、No.13、No.14、No.18、No.19、No.20、No.21、No.22、No.23」の10項目であり、「愛国心」「郷土愛」「祖先崇拜」「神仏崇拜」に関する行為であった。それ以外の17項目は、70%以上の対象者が「するべきだ」と回答した。なお、70%以上の者が「する必要はない」と判断した項目は1項目もなかった。

### 4) 「善さ」の領域判断：適合度検定 ( $\chi^2$ 検定) による検討

「道徳性尺度 (悪さ)」の27項目について、それらの行為を規制するルールが、道徳、社会的慣習、個人のどの領域に属するか判断して貰った。適合度検定により、偏りがあるかどうかを検討したところ、「No.16 先祖の墓参」「No.27 自然と調和した生き方をする」の2項目において有意差がみられず、回答が3領域にばらつく結果を得た。それ以外の25項目においては、有意差が認められ、いずれかの領域に偏って判断されることが分かった。なお、70%以上の対象者が道徳領域に属することだと判断した項目は1つもなかった。

次に、「道徳性尺度 (悪さ)」の結果の整理の場合と同じ理由から、「道徳あるいは社会的慣習」「個人」の2領域に分類して、適合度検定を実施した。その結果、「No.14、No.17、No.18、No.20、No.22、No.23」の6項目で、有意差が見られず、ルールが自分の外部にあるのか、自分自身の内部にあるのか、どちらとも言えない状況にあることが分かった。これらを除く、21項目では有意差が見られ、領域判断に偏りがあることが分かった。

更に、回答率に注目して整理をしたところ、70%以上の者が、「道徳あるいは社会的慣習」、即ち自分自身の外部にルールの基準があると判断した行為は、「No.1、No.3、No.4、No.5、No.6、No.7、No.9、No.10、No.11、No.12、No.26」の11項目であり、「公共の場でのマナー・エチケット」「規則の遵守」に関する行為であった。一方、70%以上の者が、個人領域、即ち自分自身の内部にルールの基準があると判断した行為は、「No.8 言いたいことを我慢する (76%)」「No.19 太陽に手を合わせる (76%)」「No.24 夢の実現のために努力する (81%)」「No.25 夢や目標を持つ (82%)」の4項目であり、「神仏崇拜」「夢の実現」に関する行為であった。

#### 5) 領域判断と当為性との関係：独立性の検定 ( $\chi^2$ 検定) による検討 (注3)

「道徳」「社会的慣習」「個人」の3領域と、「するべきだ」「どちらでもよい」「する必要はない」の当為性の3段階との関連性を検討するために、独立性の検定 ( $\chi^2$ 検定) を実施し、各セルについては、残差分析を用いて更に詳細な有意差を求めた。

その結果、「するべきだ」と考える群において、その行為は「道徳」領域に属する問題だと判断され項目は、「No.1 他人に対してありがとうと言う」「No.2 家族に対してありがとうを言う」「No.16 先祖の墓参をする」の3項目であり、感謝に関する行為であった。

また、「するべきだ」と考える群において、その行為は「個人」領域に属する問題だと判断されない項目は、「No.3、No.4、No.5、No.9、No.11」の5項目であり、「公共の場でのマナー・エチケット」に関する行為であった。

次に、「するべきだ」と考える群において、その行為は「個人」領域に属する問題だと判断された項目は、「No.14 家族揃っての食事」「No.24 夢の実現のための努力」「No.25 夢を持つ」の3項目であり、「夢」に関する行為であった。

#### 6) 「善さ」の実行の頻度：適合度検定 ( $\chi^2$ 検定) による検討

善い行動だと分かっている、日常生活場面で、いつも行動できているとは限らない。そこで、「道徳性尺度 (善さ)」の27項目について、自分自身が、日常、どの程度実行しているかについて、「いつも実行している」から「全く実行していない」の5段階尺度で評定を求め、思考のレベルと行動のレベルのずれについての知見を得ることを試みた。集計に当たり、「実行している」「どちらとも言えない」「実行していない」の3段階に分類し、適合度検定により、偏りが見られるかどうかを検討した。

その結果、「No.18 神仏に手を合わせる」において有意差が見られず、日常生活場面で、実行している者と、していない者が同程度いる状況だということが分かった。それ以外の26項目では、

(注3) 紙数の関係で、独立性の検定の結果は、「Table 2」に有意差の結果のみを記載した。

有意差が見られ、実行の有無に偏りが見られた。即ち「実行していない」と判断された項目は「No.19 太陽に手を合わせる」の1項目、「どちらとも言えない」と判断された項目は「No.20、No.22、No.23、No.27」の4項目で、「愛国心」「博愛」「自然との関係」に関する行為であった。それ以外の21項目は「実行している」と判断された。

更に、回答率に注目して整理をしたところ、70%以上の者が「実行している」と回答した項目は、「No.1、No.2、No.5、No.9、No.11、No.12、No.13、No.25」の8項目であった。一方、70%以上の対象者が「実行していない」と回答したのは、「No.19 太陽に手を合わせる」であった。

#### 7) 領域判断と実行の頻度との関係：独立性の検定 ( $\chi^2$ 検定) による検討 (注4)

「道徳」「社会的慣習」「個人」の3領域と、日常場面で「実行している」「どちらでもない」「実行していない」の3段階との関連性を検討するために、独立性の検定 ( $\chi^2$ 検定) を実施し、各セルについては残差分析を用いて更に詳細は有無差を求めた。

その結果、「実行している」群において、「個人」領域と判断されない項目は、「No.4、No.5、No.11、No.12」の4項目であり、「公共の場でのマナー・エチケット」に関する行為であった。「実行している」群において、「個人」領域と判断される項目は「No.25 夢や目標を持つ」の1項目であった。

次に、「実行していない」群において、「個人」領域と判断されている項目は、「No.16、No.17、No.18、No.22」の4項目であり、「祖先崇拜」「神仏崇拜」に関する行為であった。

#### 4. 領域判断と当為性および実行の頻度が「善／悪」の程度に及ぼす影響：分散分析による検討

##### 1) 当為性の程度の高低と、領域判断の相違が、道徳性尺度によって測定された「善／悪」の程度に及ぼす影響：分散分析による検討

ある行為を「するべきでない」「どちらでもない」「しても構わない」と判断する者において、「道徳」「社会的慣習」「個人」のそれぞれの領域に属すると判断することによって、「道徳性尺度(悪さ)」および「道徳性尺度(善さ)」の程度(0～10点)の評定に、どのような影響を及ぼすかについて、2要因分散分析(3×3)により検討した。

その結果、「道徳性尺度(悪さ)」では、交互作用が見られた項目で、更に単純主効果が見られた項目に注目したところ、「No.10 用がなくなったら、世話になった人にでも知らん顔をする」(F(2,170) = 3.14, p<0.05) は、「しても構わない」と判断する者において、「道徳」領域と判断することにより、「悪さ」の程度を高く評定する傾向が見られた。「No.34 カンニングする」(F

(注4) 紙数の関係で、独立性の検定の結果は、「Table 2」に有意差の結果のみを記載した。

Table1 道徳性尺度(悪さ)の結果		なすべき行為かどうか ( $\alpha$ 係数=0.89) 上段:人数(人) 下段:%				規制するルールは、どの領域に属しているか (3領域) 上段:人数(人) 下段:%			
項目 番号	行為	絶対にする べきではない。 するべきで はない。	どちらとも 言えない。	しても構わ ない。 しても全く 構わない。	適合度検定 ( $\chi^2$ ) *:p<.05 **p<.01 ***p<.001	道徳	社会的慣習	個人	適合度検定 ( $\chi^2$ ) *:p<.05 **p<.01 ***p<.001
9	他の人を、いじめる。	174 91	13 7	4 2	***	133 69	24 13	34 18	***
4	動物を虐待する。ペットを捨てる。	188 77	3 21	0 2	***	142 74	23 12	26 14	***
14	人を精神的に傷つける。	180 94	9 5	2 1	***	147 77	4 2	40 21	***
37	仕事をさぼる。無断で休む。	166 86	24 13	1 1	***	52 27	92 48	47 25	***
1	万引きする。	189 98	1 1	1 1	***	140 73	42 22	9 5	***
3	人をバカにする。見下す。	155 80	32 17	4 3	***	85 45	14 7	92 48	***
34	試験のときなどに、カンニングする。	171 90	12 6	8 4	***	71 37	47 25	73 38	*
23	児童虐待。子どもに暴力を振るう。	190 99	1 1	0 0	***	160 84	19 10	12 6	***
36	他人の悪口を言う。陰口を言う。	140 74	41 21	10 5	***	75 39	14 7	102 54	***
28	キセル(所定の料金を支払わずに乗車する)。	166 86	15 8	10 6	***	82 43	78 41	31 16	***
30	電車の中や、公共の場で、自分の子どもが騒いでも注意しない【その子どもの親の態度】。	179 93	11 6	1 1	***	75 39	66 35	50 26	
2	ゴミ、タバコ、空き缶などのポイ捨てをする。	186 97	5 3	0 0	***	109 57	54 28	28 15	***
17	不倫・浮気。	125 65	46 24	20 11	***	50 26	25 13	116 61	***
29	売春。援助交際。	160 83	26 14	5 3	***	92 48	42 22	57 30	***
22	約束を守らない。約束を破る。秘密を守らない。	176 92	12 6	3 2	***	100 53	16 8	75 39	***
19	うそのうわさを流す。	150 78	33 17	8 5	***	93 48	13 7	85 45	***
27	信号無視。	157 82	26 14	8 4	***	64 34	95 49	32 17	***
25	タバコを吸う。	61 32	43 23	87 45	***	7 4	28 15	156 81	***
24	酔っぱらう。	17 9	47 25	127 66	***	9 5	19 10	163 85	***
12	列への割り込み。順番を守らない。	173 90	17 9	1 1	***	90 47	63 33	38 20	***
11	電車の座席を詰め合わせて座らない。 1人以上の席を取る。	137 71	43 23	11 6	***	62 32	76 40	53 28	
38	小学生・中学生の茶髪。	61 32	63 33	67 35		13 7	59 31	119 62	***
32	授業中におしゃべりをする。	123 64	46 24	22 12	***	44 23	40 21	107 56	***
26	違法駐車。	133 69	49 26	9 5	***	52 27	100 53	39 20	***
13	食べ物を残したり、粗末にする。	148 77	37 19	6 4	***	72 37	47 25	72 38	*
15	電車などで、お年寄りに席をゆずらない。	129 67	53 28	9 5	***	78 40	64 34	49 26	*
35	お年寄りに冷たくする。やさしくない。	154 81	31 16	6 3	***	115 60	24 13	52 27	***
8	親を大切にしない。親不孝をする。	160 83	30 16	1 1	***	111 58	15 8	65 34	***
18	困っている人を助けない。	129 67	55 29	7 4	***	94 49	17 9	80 42	***
10	用がなくなったら、世話になった人 にでも知らん顔する。	171 89	15 8	5 3	***	89 46	28 15	74 39	***
16	電車の中で、携帯電話で声を出して話をする 【緊急時や自分1人しか乗っていない場合を除く】。	159 83	27 14	5 3	***	58 30	98 52	35 18	***
21	物を大事にしない。修理しないで、新品に 買い換える。	72 38	85 44	34 18	***	30 16	41 21	120 63	***
20	親の言いつけに従わない。	47 25	96 50	48 25	***	32 17	22 12	137 71	***
5	「ありがとう」「ごめんなさい」を言わない。	154 80	35 18	2 2	***	75 39	36 19	80 42	***
7	離婚する。	28 15	76 40	87 45	***	10 5	36 19	145 76	***
6	人工中絶をする。	63 33	101 52	27 15	***	56 29	33 17	102 54	***
31	自殺。自殺未遂。	144 75	33 17	14 8	***	76 40	13 7	102 53	***
33	人にうそをつく。	104 54	70 37	17 9	***	79 41	8 4	104 55	***

現代日本の青年期女子における善悪に関する意識構造と道徳領域判断

3つの領域判断と妥当性の程度との関係	規制するルールは、どの領域に属しているか (2領域) 上段：人数(人) 下段：%			悪さの程度 ( $\alpha$ 係数=0.96)		因子分析(主因子法、プロマックス回転)による 因子負荷量				
	独立性の検定 ( $\chi^2$ ) *:p<.05 ***:p<.01 ****:p<.001	道徳・ 社会的慣習	個人	適合度検定 ( $\chi^2$ ) *:p<.05 ***:p<.01 ****:p<.001	平均値	標準偏差	第1因子： 狡猾さ、卑劣さ、 交通法規違反、 男女・性の問題	第2因子： 公共の場での ルールの無視、 自分を大切にしない	第3因子： 他者を大切にしない、 物を大切にしない、 関係性の希薄さ	第4因子： 生命軽視
**	157 82	34 18	***	8.30	1.80	<b>0.73</b>	-0.19	-0.04	0.19	
**	165 86	26 14	***	9.07	1.38	<b>0.67</b>	-0.03	0.01	-0.05	
***	151 79	40 21	***	8.37	1.62	<b>0.64</b>	-0.09	0.12	0.14	
*	144 75	47 25	***	7.47	2.21	<b>0.56</b>	0.31	-0.01	-0.07	
	182 95	9 5	***	8.80	1.36	<b>0.54</b>	0.08	0.04	-0.03	
*	99 52	92 48		7.19	2.03	<b>0.53</b>	0.07	0.05	0.19	
	118 62	73 38	***	7.52	2.23	<b>0.53</b>	0.18	0.14	0.06	
***	179 94	12 6	***	9.44	1.09	<b>0.52</b>	-0.20	0.31	0.00	
***	89 46	102 54		6.91	2.29	<b>0.51</b>	0.10	0.20	0.18	
***	160 84	31 16	***	7.42	2.32	<b>0.50</b>	0.31	-0.07	0.10	
*	141 74	50 26	***	7.76	2.02	<b>0.49</b>	0.40	0.03	-0.04	
*	153 85	28 15	***	7.73	1.85	<b>0.48</b>	0.42	-0.09	-0.14	
***	75 39	116 61	**	6.81	2.39	<b>0.42</b>	0.19	-0.17	0.25	
***	134 70	57 30	***	7.89	2.29	<b>0.40</b>	0.04	-0.01	0.50	
	116 61	75 39	**	7.51	2.10	<b>0.39</b>	0.18	0.34	-0.07	
***	106 55	85 45		6.95	2.34	<b>0.39</b>	0.20	0.19	0.13	
***	159 83	32 17	***	7.06	2.45	<b>0.37</b>	0.32	0.15	0.02	
*	35 19	156 81	***	4.37	3.01	-0.14	<b>0.74</b>	-0.06	0.29	
**	38 15	163 85	***	3.23	2.42	-0.16	<b>0.69</b>	-0.03	0.31	
***	153 80	38 20	***	6.92	2.16	0.32	<b>0.54</b>	0.15	-0.27	
***	138 72	53 28	***	6.08	2.20	0.07	<b>0.52</b>	0.30	-0.15	
	72 38	119 62	***	4.43	2.76	-0.07	<b>0.47</b>	0.09	0.32	
	84 44	107 56		6.01	2.27	0.31	<b>0.47</b>	0.05	-0.01	
**	152 80	39 20	***	6.26	2.42	0.28	<b>0.44</b>	0.06	0.24	
***	119 62	72 38	***	6.64	2.20	0.33	<b>0.34</b>	0.18	0.00	
*	122 74	49 26	***	6.51	2.16	-0.17	0.22	<b>0.80</b>	-0.03	
**	139 73	52 27	***	7.10	2.20	0.06	0.05	<b>0.75</b>	0.15	
***	126 66	65 34	***	7.66	2.03	0.24	-0.22	<b>0.66</b>	0.01	
***	111 58	80 42	*	6.61	2.00	0.00	0.22	<b>0.51</b>	0.19	
**	117 61	74 39	**	7.50	1.97	0.35	-0.05	<b>0.50</b>	0.05	
	156 82	35 18	***	6.67	2.24	0.11	0.36	<b>0.49</b>	-0.18	
***	71 37	120 63	***	5.01	2.31	-0.01	0.33	<b>0.45</b>	0.23	
**	54 29	137 71	***	4.95	2.25	0.11	0.21	<b>0.37</b>	0.22	
***	111 58	80 42	*	6.90	2.26	0.27	0.25	<b>0.30</b>	-0.07	
*	46 24	146 76	***	3.95	2.53	0.06	0.24	-0.15	<b>0.59</b>	
**	89 46	102 54		6.03	2.49	0.08	-0.01	0.06	<b>0.53</b>	
***	89 47	102 53		7.64	2.94	-0.10	-0.10	0.37	<b>0.52</b>	
*	87 45	104 55		6.09	2.32	0.29	0.21	0.19	<b>0.34</b>	
因子相関行列						1.00				
						<b>0.52</b>	1.00			
						<b>0.58</b>	<b>0.49</b>	1.00		
						<b>0.28</b>	<b>0.22</b>	<b>0.28</b>	1.00	
									<b>0.28</b>	1.00

Table2 道徳性尺度(善さ)の結果		1. なすべき行為かどうか ( $\alpha$ 係数=0.89) 上段:人数(人) 下段:%				どの領域に属する行為か (3領域) 上段:人数(人) 下段:%			3つの領域判断と当為性の 程度との関係	どの領域に属する 行為か(2領域) 上段:人数(人) 下段:%		
項目 番号	行為	必ずそうする べきだ。 するべきだ。	どちらとも言 えない。	そうしなくて も構わない。 そうする必要 は全くない。	適合度検定 ( $\chi^2$ ) *:p<.05 **:*p<.01 ***:p<.001	道徳	社会的慣習	個人	適合度検定 ( $\chi^2$ ) *:p<.05 **:*p<.01 ***:p<.001	独立性の検定 ( $\chi^2$ ) *:p<.05 **:*p<.01 ***:p<.001	道徳・ 社会的慣習	個人
4	学校の先生に挨拶をする。	163 85	22 12	6 3	***	61 32	93 49	37 19	***	**	154 81	37 19
3	近所の人に挨拶をする。	156 81	26 14	9 5	***	44 23	114 60	33 17	***	*	158 83	33 17
2	家族の人に対して、「ありがとう」 など、感謝の言葉を言う。	178 93	10 5	3 2	***	100 53	31 16	60 31	***	*	131 69	60 31
1	他人に対して、「ありがとう」など、 感謝の言葉を言う。	185 96	5 3	1 1	***	116 61	42 22	33 17	***	*	158 83	33 17
9	乗り物の中で、携帯電話で声を出して 話をしない(緊急事態や、自分1人 しか乗っていない場合は除く)。	168 88	14 7	9 5	***	50 26	101 53	40 21	***	**	151 79	40 21
7	乗り物の中で、障害のある人、 怪我(けが)をしている人に 席をゆする。	184 96	4 2	3 2	***	110 57	59 31	22 12	***		169 88	22 12
6	乗り物の中で、お年寄りに席をゆする。	160 84	20 10	11 6	***	81 42	74 39	36 19	***		155 81	36 19
8	人間関係を大切にするために、 自分の言いたいことを我慢する。	43 23	108 56	40 21	***	18 9	28 15	145 76	***		46 24	145 76
5	年上の人に対して敬語(相手を 敬った言葉遣い)を使う	166 86	22 12	3 2	***	74 39	96 50	21 11	***	**	170 89	21 11
22	日本人を愛する。大切に思う。	87 46	71 36	33 18	***	37 19	35 18	119 63	***	***	92 37	119 63
23	世界中の人を愛する。大切に思う。	113 59	47 25	31 16	***	60 31	37 19	94 50	***	**	97 50	94 50
21	自分の故郷を愛する。大切に思う。	111 58	53 28	27 14	***	35 18	34 18	122 64	***		89 36	122 64
20	日本の国を愛する。大切に思う。	83 44	69 35	39 21	***	42 22	46 24	103 54	***	**	88 46	103 54
24	夢や目標を実現させるために、 努力や辛抱をする。	166 87	23 12	2 1	***	27 14	10 5	154 81	***	**	37 19	154 81
26	自然を大切にする。	181 95	8 4	2 1	***	100 53	50 26	41 21	***		150 79	41 21
25	夢や目標を持つ。	160 83	24 13	7 4	***	28 15	5 3	158 82	***	***	33 18	158 82
27	自然と調和した生き方をする。	133 70	44 23	14 7	***	55 29	57 30	79 41		**	112 59	79 41
14	家族揃って、食事をする。	114 60	52 27	25 13	***	34 18	52 27	105 55	***	*	86 45	105 55
15	親孝行する。	178 94	10 5	2 1	***	94 50	18 9	79 41	***		112 59	79 41
16	先祖のお墓参りに行く。	140 73	38 20	13 7	***	66 35	58 30	67 35		**	124 65	67 35
17	自分の先祖を大切に思う。	133 70	44 23	14 7	***	59 31	39 20	93 49	***	***	98 51	93 49
18	神仏に手を合わせる。	80 42	64 34	47 24	*	41 21	46 24	104 55	***	***	87 45	104 55
19	太陽に手を合わせる。	13 7	56 29	122 64	***	15 8	31 16	145 76	***		46 24	145 76
13	年中行事(正月・お盆・お節句・ お月見など)を大切にする。	100 53	63 33	28 14	***	23 12	92 48	76 40	***	*	115 60	76 40
12	法律を守る。	174 91	14 7	3 2	***	73 38	107 56	11 6	***		180 94	11 6
11	社会のルールを守る。	175 91	15 8	1 1	***	65 34	114 60	12 6	***	*	179 94	12 6
10	小学生・中学生が校則を守る。	134 69	45 24	12 7	***	63 33	95 50	33 17	***		158 83	33 17

現代日本の青年期女子における善悪に関する意識構造と道徳領域判断

適合度検定 ( $\chi^2$ ) *:p<.05 ***:p<.01 ***:p<.001	実行の程度 ( $\alpha$ 係数=0.85) 上段:人数(人) 下段:%			適合度検定 ( $\chi^2$ ) *:p<.05 ***:p<.01 ***:p<.001	3つの領域判断と実行の程度との関係  独立性の検定 ( $\chi^2$ ) *:p<.05 ***:p<.01 ***:p<.001	善さの程度 ( $\alpha$ 係数=0.93)		因子分析(主因子法、プロマックス回転)による 因子負荷量					
	いつも実行している。	どちらとも言えない。	殆ど実行していない。 全く実行していない。			平均値	SD	第1因子: 公共の場での マナー・ エチケット	第2因子: 愛国心、 郷土愛、 博愛	第3因子: 夢の実現、 自然との関係、 親との関係	第4因子: 祖先崇拝、 神仏崇拝	第5因子: 規則の遵守	
***	127 66	36 19	28 15	***	*	7.73	1.81	<b>0.82</b>	0.03	0.03	-0.04	-0.11	
***	129 67	24 13	38 20	***		7.73	1.72	<b>0.81</b>	0.14	-0.03	0.02	-0.11	
***	144 74	24 13	23 12	***		8.61	1.49	<b>0.74</b>	-0.18	0.06	0.06	0.01	
***	181 95	8 4	2 1	***		8.98	1.15	<b>0.63</b>	-0.14	0.17	0.01	0.10	
***	164 86	12 6	15 8	***		7.30	2.04	<b>0.60</b>	-0.03	0.02	0.13	0.11	
***	111 58	56 29	24 13	***		8.63	1.53	<b>0.55</b>	0.16	0.07	-0.11	0.13	
***	106 56	34 18	51 26	***		7.83	2.04	<b>0.49</b>	0.24	-0.02	-0.11	0.12	
***	106 56	65 34	20 10	***		5.45	2.14	<b>0.42</b>	0.00	-0.13	0.18	-0.06	
***	168 88	18 9	5 3	***	**	8.12	1.58	<b>0.40</b>	0.04	0.01	0.09	<b>0.31</b>	
	73 38	79 41	39 21	***	*	6.12	2.40	-0.01	<b>0.88</b>	-0.04	0.07	0.00	
	57 30	85 44	49 26	**		6.77	2.35	-0.07	<b>0.77</b>	<b>0.33</b>	-0.09	-0.11	
*	101 54	58 30	32 16	***		6.48	2.47	-0.01	<b>0.73</b>	0.00	0.16	0.02	
	52 27	81 43	58 30	*		5.58	2.61	0.04	<b>0.65</b>	-0.04	0.16	0.03	
***	120 62	47 25	24 13	***		8.18	1.71	-0.09	-0.01	<b>0.74</b>	0.17	-0.01	
***	126 66	55 29	10 5	***		8.55	1.49	0.03	0.07	<b>0.71</b>	-0.11	0.06	
***	138 72	29 15	24 13	***	*	8.19	1.82	0.19	-0.12	<b>0.69</b>	0.00	-0.20	
*	58 31	91 47	42 22	***		7.64	2.01	-0.13	0.18	<b>0.60</b>	-0.03	0.10	
	124 64	34 18	33 18	***		7.03	2.27	0.14	0.12	<b>0.44</b>	0.02	0.02	
*	105 55	62 32	24 13	***		8.20	1.68	0.15	0.04	<b>0.40</b>	0.11	0.19	
***	124 66	29 15	38 19	***	**	7.22	2.13	-0.07	-0.05	0.20	<b>0.82</b>	0.11	
	89 46	58 31	49 26	***	*	6.95	2.34	0.06	0.06	0.13	<b>0.80</b>	-0.05	
	64 34	50 25	77 41		***	5.76	2.78	0.05	0.19	-0.18	<b>0.77</b>	0.00	
***	5 3	24 13	162 84	***		3.34	2.78	0.13	<b>0.30</b>	-0.06	<b>0.39</b>	-0.11	
**	133 70	41 21	17 9	***		6.38	2.60	0.17	<b>0.22</b>	0.05	<b>0.28</b>	0.08	
***	158 82	31 16	2 2	***	**	8.38	1.89	-0.08	-0.10	-0.05	0.03	<b>0.86</b>	
***	157 82	34 18	0 0	***	*	8.05	1.78	0.05	-0.01	0.03	-0.04	<b>0.85</b>	
***	111 58	71 37	9 5	***		7.03	2.08	0.14	0.19	-0.01	0.00	<b>0.56</b>	
因子相関行列								1.00					
								<b>0.42</b>	1.00				
								<b>0.47</b>	<b>0.42</b>	1.00			
								<b>0.44</b>	<b>0.48</b>	<b>0.41</b>	1.00		
								<b>0.45</b>	<b>0.35</b>	<b>0.37</b>	<b>0.41</b>	1.00	

(4,182) = 3.31,  $p < 0.05$ ) は、「しても構わない」と判断する者において、「個人」領域と判断することにより、「悪さ」の程度を低く評定する傾向が見られた。「No.33 人にうそをつく」(F (2,177) = 8.47,  $p < 0.001$ ) は、「するべきでない」と判断する者において、「道徳」領域と判断することによって「悪さ」の程度を高く評定する傾向が見られた。「No.36 悪口を言う」(F (2,175) = 9.12,  $p < 0.001$ ) と判断する者において、「するべきでない」と判断する者において、「個人」領域と判断することにより、「悪さ」の程度を低く評定する傾向が見られた。「No.15 乗り物の中で、お年寄りに席をゆずらない」(F (4,182) = 4.00,  $p < 0.01$ ) は、「しても構わない」と判断する者において、「社会的慣習」と判断することにより、「悪さ」の程度を高く評価する傾向が見られた。

次に、「道徳性尺度（善さ）」では、「No.6 乗り物の中で、お年寄りに席をゆずる」(F (4,182) = 6.48,  $p < 0.001$ ) は、「する必要はない」と判断する者において、「道徳」領域と判断することにより、「善さ」の程度を高く保持する傾向が見られた。「No.7 乗り物の中で、障害のある人に席をゆずる」(F (4,182) = 9.31,  $p < 0.001$ ) は、「するべきだ」と判断する者において、「善さ」の程度を高く評定する傾向が見られた。

## 2) 実行の頻度の高低と、領域判断の相違が、道徳性尺度によって測定された「善／悪」の程度に及ぼす影響：分散分析による検討

ある行為を「実行している」「どちらとも言えない」「実行していない」と判断する者において、「道徳」「社会的慣習」「個人」のそれぞれの領域に属すると判断することによって、「道徳性尺度（善さ）」の程度（0～10点）の評定に、どのような影響を及ぼすかについて、2要因分散分析（3×3）により検討した。

その結果、交互作用が見られた項目で、更に単純主効果がある項目に注目したところ、「No.3 近所の人への挨拶」(F (4,182) = 3.10,  $p < 0.05$ ) は、「実行していない」と判断する者において、「道徳」領域と判断することにより、「善さ」の程度を高く評定する傾向が見られた。「No.26 自然を大切にする」(F (4,182) = 4.02,  $p < 0.01$ ) は、「実行していない」と判断する者において、「道徳」「社会的慣習」と判断することによって、「善さ」の程度を高く評価する傾向が見られた。「No.25 夢を持つ」(F (4,182) = 2.61,  $p < 0.05$ ) は、「実行している」と判断する者において、「社会的慣習」領域において、「善さ」の程度を高く評価する傾向が見られた。「No.10 小・中学生が校則を守る」(F (2,176) = 3.42,  $p < 0.05$ ) は、「実行している」と判断する者において、「道徳」領域と判断することにより、「善さ」の程度を高く評価する傾向が見られた。



## 考 察

### 1. 道徳性尺度 (悪さ)

#### 1) 当為性

今回実施した調査は、ニュートラルな状況で回答を求めるものであったが、実際、調査対象者は、各自、様々な社会的文脈を想定し、回答したと考えられる。これまでの調査結果から、「やむを得ない状況」「故意にやった訳ではない」など、様々な条件が加わると、当為性が緩んでくることが分かっている(阿部; 1998)。その状況で、「すべきでない」の回答が70%未満という低いものになった項目は、「他者、物、自分自身を大切にしない」に関する行為であった。これを更に詳細に検討すると、「男女・性に関する問題」、対人関係の中でも「親、高齢者、困っている人に対する態度」であった。つまり、家族関係を揺るがす「離婚、不倫、中絶、親との関係」において「すべきではない」という考えが希薄になってきているということではないだろうか。家族はあらゆる対人関係の基礎となるが、その関係性が揺らいでいると考えられる。更に高齢者や困っている人など、いわゆる弱者に対する「いたわり」が叫ばれていることと裏腹に、その当為性は低くなっていることが分かる。これも家族関係の当為性が低くなったことにより、家庭の中で「いたわり」の心が育成されにくくなったのかもしれない。

#### 2) 領域判断

個人の自由な判断を尊重するという考え方の元に、自分自身を大切にしない、親や夫婦という家族関係を大切にしないという現象が起きているという結果が得られた。

現代社会では「道徳」領域に属する問題は、「犯罪」という法律によって行動が規制されていたり、罰があるかどうか基準になっているようである。これは成人期の女子を対象にした調査結果(阿部; 1998)と同様の結果であることを考えると、若者に、そのような判断傾向があるのではなく、むしろ上の世代から伝達されてきたと考えられる。何時から、日本では道徳の問題は犯罪と同義になってしまったのだろうか。これについては今後、更に検討する必要がある。

また、「自殺、中絶」など生命に関する問題、「うそをつく、悪口を言う」などという「卑劣さ」に関する問題は、道徳、社会的慣習、個人のどの領域に属する問題か不明確になっていることが分かった。「個人」の領域の問題と判断すれば、死ぬこと、殺すことは容易なこととなる。自殺、中絶などの抑止には、これら生命に関する問題は「道徳」領域に属する問題だと指導が必要なのではないだろうか。

そして、喫煙、飲酒など、自分自身の健康を害する行為が「個人」領域に属すると判断されて

いることと、同じレベルで、将来、「生命軽視」が扱われることも考えさせられる。

### 3) 領域判断と当為性との関係

「道徳」とは、上からの強圧的な指導であるとか、因襲的なものであると考え、すべての行動の基準は、個人の自由な判断に任されるべきだと考えることが、その行為は「しても構わない」と考えることと関連するのではないだろうか。現代社会の日本人が、昔の日本人の行為とどの側面が、勝手気ままになったのだろうか。

こうした視点から、今回の調査結果を検討すると、そこには、あらゆる行為が、「個人」領域に属する行為だと判断することによって、何を「しても構わない」と考えるようになるのではないか。特に、「生命軽視」「男女・性に関する問題」「他者、物、自分自身を大切にしない」という行為に、顕著に現れていると考えられる。

個人の自由な判断に任されるべきだという考え方が進展している中で、「道徳」領域に属し、「するべきではない」と考えられているものは、「狡猾さ・卑劣さ」「他者、物を大切にしない」という行為であっても、いじめ、虐待に関係する行為であった。これらの行為に対する敏感さは、青年期特有のものかもしれない。しかし、大人たちがいじめや虐待を見て見ぬふりをし続けたり、大量消費は美德だという姿を見せることによって、若者たちは「するべきではない道徳領域に関する行為」だと判断されていた行為を、次々と「個人」領域の問題で、「しても構わない」行為へと移行へと移行されてしまうことが懸念される。大人社会の改善が急務であろう。

## 2. 道徳性尺度（善さ）

### 1) 当為性

道徳に関する善悪、それぞれの行為は、悪さの方は「するべきではない」と考えることが大切であり、善さの方は「するべきだ」と考えることが大切ではないだろうか。悪さは抑制の問題であり、善さは実行が問題だと言えばよいかもしれない。それを考えると、70%以上の者が「する必要はない」と考えている項目が1つもないことで安心することはできないだろう。むしろ「するべきだ」という回答が70%未満の行為に注目し、現代の日本で失われたものは何かを探ることが重要ではないだろうか。その視点に立つと、「神仏崇拜」「祖先崇拜」「家族を大切にすること」などということになる。軍国主義との非難が出そうな行為であるが、そうやって眼をそむけていることが問題なのかもしれない。今後、詳細な検討を加える必要があると感じている。

### 2) 領域判断

道徳と社会的慣習を加えると70%を超える回答率が得られる項目は、「挨拶」や「規則の遵守」

に関する行為である。これは、挨拶ができ、敬語が使え、校則を守っている若者たちであっても、それ以外の行為については、自分の内部にルールや基準で行動しているということであろう。社会的文脈の変化だけでなく、気分次第で判断を変化させているということであろう。学校で良い子に見えても、「まさかこの子が、こんなことをするなんて」と驚かされることが起きているが、それはこのように「公共の場でのマナー・エチケット」は身につけている場合でも、それ以外の「善行」については、「個人」領域の問題として判断しているから、気分が変動すれば「キレた」といって、行動が豹変することがあったり、嫌いだからやらないということが、起きるのだと言えよう。

### 3) 領域判断と当為性との関係

この「善さ」の当為性と領域判断との関係を検討すると、「するべきだ」という回答率が70%未満という低い値になった行為は、「愛国心」「郷土愛」「祖先崇拜」「神仏崇拜」に関するものであった。こうした行為は、第二次世界大戦後、軍国主義を生むとして、非難された項目である。その結果、戦後、日本人の多くが、自分たちは無神論者だと公言するようになっていったのではないだろうか。

次に、道徳的に善いと考えられる行為について、それが「道徳」「社会的慣習」「個人」のどの領域に属する行為であるかを判断して貰ったところ、70%以上の対象者が「道徳」領域に属する行為だと判断した項目は1つもなかった。即ち、現代日本における青年女子は、「善さ」は、道徳で教えられるものではなく、個人の判断に任されるべきものだと考えているということが分かった。善なる行為を、個人の判断により決定し、自己の行動を、律することが大切だと教育されてきた効果が出ているのかもしれない。しかし、個人の判断は、気分による変動を孕み、好き嫌いによって判断する可能性をもっている。人間としてなすべき善行の基準は個人だと考えることは、究極的には、善とは個人にとって快適であることだということになるであろう。日本における善なる行為の基盤の危うさを感じる。

さて、「道徳」と「社会的慣習」の境界線を決めることは難しいことかもしれない。そこで「するべきことだ」と考える群で「道徳」領域の問題だと判断する者が多い行為と、「個人」領域の問題だと判断する者が少ない行為の違いを検討することによって、この境界線がみえてくるかもしれないと考えた。即ち、「個人」領域に属する問題だと判断する者が少ないということは、この場合、「道徳」あるいは「社会的慣習」に判断が同じように分かれているということである。その視点から、調査結果を見ると、公共の場でのマナーとしての「挨拶」「敬語の使用」などは、「日本だから、こんなことをしなければいけない」という批判を浴びることによって、崩れる可能性を孕んでいるように思える。

「するべき」で、「個人」領域に属する行為は、「夢」に関するものであった。現代の若者たち

は、様々な夢を持ち、その実現のために努力をしている。その一方で、フリーター、ニートなどの問題がある。何故、そのような問題が起きているのかと考えるとき、「夢」が個人だけのものになっているからではないかと考えられる。若者たちは、社会を支えるとか、他人の役に立つことなど大切ではないと考えている訳ではないだろう。しかし、「夢」の実現が、個人の自由に任されているということによって、いつまでも自分に合った職業を探し続けることが良いことだということになってしまうのだろう。また、「夢」の内容も、自分が輝けることが大切であり、社会の歯車の1つになって働くことは大したことではない、あるいは罪悪だとさえ感じてしまっているのかもしれない。自由、個人に任されているということによって、若者たちは、見果てぬ夢に振り回されているのかもしれない。

### 3. 分散分析による検討

ニュートラルな状況では「悪い」と感じられる行為であっても、「わざとやった訳ではない」「やむを得ない事情があった」など社会的文脈によっては、その「するべきでない」行為が「しても構わない」行為へと判断が変わることがある。このとき「しても構わない」行為は「悪さ」の程度を低く評定することに繋がる。「やむを得ないことだった」とはいえ、「悪い」ことだったと思うかどうかは、その行為が「道徳」領域に属する行為だと判断されているかに関係しているのではないだろうか。

即ち、ある行為が「道徳」領域に属する行為だと判断することにより、「する必要はない」と判断しても、「悪い」ことだと評定できるのではないだろうか。ところが、ある行為が「個人」領域に属する行為だと判断することにより、個人の問題だから「しても構わない」と感じ、その結果、大して悪くない行為だと捉えていることが分かる。

これらのことから、善悪、いずれの行為においても、それらの行為が、どの領域に属する行為であるかという「領域判断」の重要性が指摘できると考えられる。

特に「善さ」の行為については、「家族」「祖先崇拜」「神仏崇拜」に関する行為が「個人」領域に判断された。しかも「すべき善い行為」とは判断されていない。これらの行為は、第二次世界大戦以前には、修身の教科書に掲載され、「徳目」として注入されていたものであろう。戦後も、道徳の教科書で取り扱われることになっているが、「家」「祖先」「神仏」などは、国家主義、軍国主義の復活に直結することであるかのように扱われ、家庭でも、学校でも教育することが控えられてきたのではないだろうか。現代日本社会の道徳心の低下に直接繋がるとはいえないかもしれないが、無関係ではないかもしれない。今後、詳細な検討をする必要があると考える。

## 要 約

日本人の通学制女子大学生209名の中から、社会的望ましさの得点の高い者を除いた191名を対象に、道徳に関する行為について、その「善悪の程度」「当為性」「領域判断」「実行の程度」について質問紙を用いて、検討した。

その結果、悪さについては、それほど悪くなく、しても構わない行為で、個人領域に属すると判断されたものは、自分自身を大切にしない行為、男女・性に関する行為であることが分かった。ところが、「悪さ」については、その行為が「道徳」領域に属する行為だとして判断されることによって、「しても構わない」が「悪い」と判断する傾向が認められ、悪いことは悪いという意識を保持できる傾向にあることが分かった。このことから、ある行為を「道徳」領域のものであると教えることが、様々な問題行動を抑止することに繋がるのではないかと考えられる。

「善さ」については、道徳領域だと判断された行為は1つもなく、すべて社会的慣習あるいは個人領域に属する行為だと考えていることが分かった。これらは現代の若者が自律的になったということではなく、むしろ気分や好き嫌いによって様々な行動を決定する傾向があると考えられる。挨拶や敬語を使用することができるようになることが躰でないことは分かっている。それでは何を根幹として道徳心向上のための教育をすればよいかということになるが、「悪さ」については「いじめ、虐待」「大量消費を美德する」などは、むしろ大人社会が喪失している問題であり、若者社会の中では「すべきでない道徳に属する行為」だと考えられていることが分かった。一方、「善さ」については、それほど善くなくて、すべきだと感じている者が少ない行為で、個人領域に属する行為は、家族との関係、祖先崇拜、神仏崇拜、などであることが分かった。こうした行為が減少したことは、日本が封建的で、軍国主義的な国家から脱却できた証だと考えることもできるが、他方、対人関係の基礎を成す、家族内の対人関係を希薄化させることになったと考えることもできる。今後、詳細な検討をする必要があると考える。

### 参考文献

- 阿部洋子 1996 道徳性尺度作成の試み——予備的研究—— 日本女子大学紀要 人間社会学部 第6号  
 阿部洋子 1998 道徳性尺度作成の試み——予備的研究(3)—— 日本女子大学紀要 人間社会学部 第8号  
 阿部洋子 2005 現代日本人における「道徳性」に関する意識構造の心理学的解明の試論——「道徳性尺度」作成のための予備的調査(2)—— 跡見学園女子大学文学部紀要 第38号  
 藤原正彦 2005 国家の品格 新潮新書141 新潮社  
 京都市道徳教育振興市民会議 2002 毎日の生活でのことについて《アンケート調査》児童・生徒用調査用紙  
 京都市道徳教育振興市民会議 2002 毎日の生活でのことについて《アンケート調査》大人用調査用紙  
 京都市道徳教育振興市民会議 2004 京都市道徳教育振興市民会議からのメッセージ～共に生きるための知恵

を寄せ合い～「しなやかな道德教育を！」

文部科学省 2002 「心のノート」活用のために 大蔵省印刷局

文部省 1988 小学校指導書 道德編 大蔵省印刷局

文部省 1988 中学校指導書 道德編 大蔵省印刷局

向谷匡史 2002 いま、修身を読む ぶんか社

Smetana, J.G., Bridgeman, D.L. & Turiel, E. 1983 Differential of domains and prosocial behavior. In D.L. Bridgeman (Ed.), *The nature of prosocial development: Interdisciplinary theories and strategies*. (pp.163-183) New York: Academic Press.

Turiel, E 1978 The development of concepts of social structure: Social convention In Glick, J & Clark-Stewart, K.A. (Eds.), *The Development of social understanding*. (25-107). New York: Gardner Press.

Turiel, E 1983 *The Development of social knowledge: Morality and convention* Cambridge, England: Cambridge